



ネルヴァルと『ニコラス・クリミウスの地下世界への旅』

著者	間瀬 玲子
雑誌名	筑紫女学園大学研究紀要
号	15
ページ	17-26
発行年	2020-01-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00001010/

ネルヴァルと『ニコラス・クリミアスの地下世界への旅』

間 瀬 玲 子

Nerval et *Voyage de Nicolas Klimius dans le monde souterrain*

Reiko MASE

I. 序

19世紀のフランスの作家ジェラルド・ド・ネルヴァル Gérard de Nerval は地下世界に異常なほどの関心を抱いていた。ネルヴァルの全作品を精査すると地下世界に関わる文学作品に関する言及が多いことに驚きを感じざるを得ない。本論文ではノルウェー出身でありデンマークで過ごした作家ルドヴィック・ホルベリ（文献によってはルドヴィク・ホルベルグ、ルドヴィッグ・ホルベルクと表記されている）Ludvig Holberg（1684–1754）の『ニコラス・クリミアスの地下世界への旅 地球に関する新しい理論及び現在まで知られていない第五君主制の歴史付き』（以下『クリミアス』と略す）がネルヴァルにどの程度影響を与えたのか、またネルヴァルはどの言語の本を参照したのかを検証する考えである。本論文を書くきっかけは、まずラテン語版の電子テキストと書籍、フランス語訳の電子テキスト及び書籍、そしてネルヴァルが『クリミアス』を言及した文章の原書（1845年刊行）及び電子テキストを入手することができたからである。また後に記述するように『クリミアス』は日本語に翻訳されていることもきっかけの一つである。なお本論文において固有名詞及び名詞を表記する場合、フランス語訳に最も近いと考えられるカタカナで表記する。この表記が本論文の主たる論点とはあまり関係がないからである。

II. 『ニコラス・クリミアスの地下世界への旅』

ネルヴァルは自著においてこの作品名は言及しても、この作品を執筆した作家名に関して言及したことはない。作者は喜劇作品、小説、歴史書など多彩な作品を残した作家である。幸いにも『クリミアス』は日本語の翻訳が出版されている。(1)また翻訳者の多賀茂氏による詳細な解説「『ニコラス・クリミアスの地下世界への旅』について」も収録されている。1741年に出版された *Nicolai Klimii Iter subterraneum* にはコペンハーゲンとライプツィヒで出版されたと記載されている。この書籍には BIBILTHECA B. ABELINI とも書かれている。(2)

1741年にフランス語訳 *Voyage de Nicolas Klimius dans le monde souterrain* がコペンハーゲンのジャック・プレウス社から出版された。(3)注にも書いたように、フランス語訳の題名には「B.

アブラン氏の蔵書からモヴィヨン氏がラテン語より翻訳」と書かれている。(4)

上記の日本語訳はこのフランス語訳を翻訳したものである。日本語訳にはフランス語訳についている序文及び第1章～第16章までが翻訳されている。第9章と第11章は要約である。フランス語訳をした翻訳者による序文には「『クリミウス』においてヨーロッパ人の風俗が批判されていること」「翻訳の責任はすべて自分にあること」「自分の著書の中傷する人を軽蔑する」ということが書かれている。残念ながらこの序文から『クリミウス』の出版に関する情報を得ることはできない。

本作品において作者はクリミウスが地下世界に落ちて、ありとあらゆる国を訪問し、その国の様子を詳しく描写している。第1章から第16章まで私（クリミウス）は自分の類いまれなる経験を語っている。諸国を経めぐったクリミウスは12年ぶりに祖国に戻り、アブラン氏と再会し抱きあうことになる。

16章の最後にアブラン氏による付記がついている。ラテン語版では付記は16章とは切り離されている。

フランス語訳の16章の最終の近くに次のような一節がある。なお今後引用する際には現代フランス語の表記に一部改変を行うことにする。

J'en parlai à Mr. Abelin, pour qui je n'avais rien de secret, et qui se moqua de mon scrupule ... (5)

私はそのことをアブラン氏に話した。彼に対しては何の秘密もなかった、そして彼は心配ごとを馬鹿にした。

クリミウスは諸国を漫遊した時に結婚をし、子どもが生まれた。そして元の世界に戻り、ある女性との結婚話が持ち上がったのである。クリミウスは重婚になるのではないかと心配をして、アブラン氏に相談をしたのである。結果としてその女性と結婚をして、3人の息子が生まれた。

ここで特記すべきことは本の表題に出てくる人物（アブラン氏）が作品内にも登場するという点である。表題に書かれている「アブラン氏の蔵書」は虚構の話である。またラテン語版及びフランス語訳には著者名がどこにも記載されていない。つまり正体を明らかにしない著者が作品内の登場人物に責任を負わせたことになる。書籍に著者名を表記できない理由があったと考えるのが妥当であろう。

フランス語訳には数枚の挿絵がついている。最初は「ニコラス・クリミウス、クアマ国の皇帝、そしてその後ノルウェーのベルゲンの十字架教会の教会管理人」と書かれた図版である。クリミウスは皇帝の豪華な衣装をまとっている。2枚目が最も注目すべき図版である。地上はノルウェーである。山の中の洞窟から地下に入ったら綱がきれてしまい、クリミウスは釘竿を持って頭から落下し、ナザール星にむかう。ナザール星は単なる黒い丸である。クリミウスは頭から両手を左右に広げて星に突入する。地底にはクリミウスが経めぐった諸国の名前が書かれている。書籍で見ると、フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica 等からダウンロードした電子テキストで見ただほうがよりリアルである。

地球のど真ん中に地底の太陽がある。その太陽の顔は愛らしく、そこには多くの羽状のものや線状のものがついている。

3枚目はポチュアン人の姿を描いた図版である。樹木に手足と頭がついている。4枚目は鬘をかぶり洋服を着た猿でマルチニアン人である。立派な尻尾がついていて、2本の足でたっている。

フランス語訳版及びラテン語版の書籍と電子テキストを入手してわかったことは書籍または電子テキストによって収録されている図版の数が違うということである。

ここでフランス語訳版及びラテン語版に掲載された図版について整理してみよう。ネルヴァルがどの版を参考にしたのか、またはいかなる版も参照していない可能性があるかどうかを考察するためである。なお刊行されたすべての版を入手したわけではないことを明記しておく。

A フランス語訳版

1 1741年版（電子テキスト） Open Library (Duke University Library)

図版の枚数 4枚、4枚の図版はいずれも非常に鮮明である。1枚目の「皇帝の姿をしたクリミアス」はまず説明文が鮮明である。また皇帝の衣装がいかに立派であるかがよくわかる。書名等が書かれたページは赤と黒で表示されている。2枚目の地上及び地底の図版は非常に鮮明である。3枚目のポチュアン人、4枚目の鬘をかぶったマルチニアン人も鮮明である。

2 1741年版（電子テキスト） フランス国立図書館電子テキストサイト Gallica 収録

図版の枚数 4枚 1と図版は全く同じである。残念なことに1と比べると、多少鮮明ではない。

3 1741年版（書籍） 2を書籍化している

図版の枚数 4枚 3をアシエット社が書籍として販売している。鮮明さの点では2とあまり変わりはない。アシエット社はGallicaで公開されている電子テキストのすべてではないが、書籍として販売している。

4 1788年版（電子テキスト） Gallica 収録 『想像の旅行、夢、幻想と神秘小説』第19巻に収録された『クリミアス』(6)。この本には2枚の図版が収録されている。上記の1～3とは全く別の図版が収録されている。1枚目は第1章に掲載されている。クリミアスが近づいてきた恐ろしい怪物に対して先端がとがった長い武器（釘竿）で戦っている場面を描いている。なおクリミアスの身体には綱がついている。この恐ろしい怪物は空を飛べる獣である。翼が異常に大きくて尻尾も異常に長い。本文ではグリフォン（griffon 獅子の身体に鷲の身体と翼を持つ怪物の意味）と表記している。この図版を見た当時の読者はクリミアスを比較的若い青年だと理解したと考えられる。図版の下には「それで私はこの恐ろしい動物に対して身を守り初めた」という文章がついている。本文の文書と比較して違いはない。動物（animal）が本文では単語の冒頭が大文字 Animal に変更されているだけである。2枚目は第10章に掲載されている。クリミアスに比較的の小柄なマルチニアン人が尻尾をつける場面が描かれている。マルチニアン人はクリミアスよりも小柄で、頭は猿、2本の足

でたっていて、2本の手でクリミアスに尻尾をつけている。そのおかげでクリミアスには立派な尻尾がついている。身体をひねってマルチニアン人を見ているクリミアスの表情は明るい。図版の下には「私が目を覚ますや否や、私は猿（sapajou 尾巻き猿のこと）が入るのを見た。その猿は私の臀部に尻尾をつけるように命じられた。」と書かれている。本文の文章とは多少異なっているが、大きな違いではない。本文では「私が目を覚ますや否や、私は猿が私の部屋に入るのを見た、その猿は私の友人であると言った、そして猿は、紐で私の臀部に人工の尻尾をつけるように命じられた」と書いてある。本文のほうが説明がより詳しい。(7)

1～3では皇帝時代のクリミアスしか描かれていない。しかもかなり威厳に満ちたクリミアスである。それに対して4で描かれたクリミアスは元気な青年である。1～3で描かれたマルチニアン人と4で描かれたマルチニアン人は全くの別物としか言いようがない。どちらも『クリミアス』の10章に図版が挿入されている。この点に関しては後に更に考察を深めたいと考えている。

B ラテン語版

現時点ではフランス国立図書館では書籍を所蔵していても、電子テキストサイトにおける無料公開サービスの対象ではない。よって比較検討の対象とはしていない。

1 1741年版（電子テキスト） Open Library (Duke University Library, The Glenn Negley Collection of Utopian Literature)

収録されている図版の枚数は4枚である。4枚ともフランス語訳の1～3と同じ図版である。ただし大きな違いがある。4枚とも着色されている。白黒の図版と着色された図版では印象が全く違う。1枚目の皇帝クリミアスが身に着けているマントと帯は青色である。また靴は薄い青色である。白髪と立派な白い髭が際立っている。マントの表の青と裏地の青は微妙に色が違う。床の色もすべてが同じ色ではない。次に書名などが書かれているページに手書きで著者名が書かれている。またローマ数字の出版年の下に1741と手書きで書かれている。他にも判読不可能な手書きの文字がある。文字によってインクの色も違う。2枚目の図版は、絵はフランス語訳と同じであり、文字はラテン語で書かれている。図版全体は薄茶色である。絵及び文字は黒である。クリミアスが地上から地中に落ちる時の綱が身体にはりついている。フランス語訳の図版では、洞窟から綱が垂れ下がり、途中でできてしまっている。クリミアスの身体にも綱がついている。よって綱が切れて、クリミアスが地中に落ちてナザール星に突入しかかっていることがよくわかる。それに対してラテン語版では何のための綱なのか読者にはわかりにくい。当然ではあるが3枚目と4枚目も文字はラテン語である。3枚目のポチュアン人も色がついている。胴体と手は緑である。帯は茶色で描かれている。広げた両手の指が異常に長い。顔は穏やかな表情をしている。

カラーのおかげで風景が理解しやすくなっている。4枚目のマルチニアン人もカラーで描かれている。鬘の立派さが明瞭に描かれている。衣装は白色と茶色が混じっている。尻尾の先端がクラゲのように分岐している。風景の植物も明瞭に描かれている。この版だけがカラー版である。どのような経緯でカラー版になったのかは不明である。

2 1741年版（書籍）（廉価版）

図版は皇帝の姿をしたクリミウスのみである。他の3枚の図版は収録されていない。(8)

以上のようにフランス語訳とラテン語版を検討すると、収録されている図版がすべて同じであるとは言えないことが判明した。なおネルヴァルの死後出版された書籍及び電子テキストは検討の対象とはしていない。

Ⅲ. ネルヴァルによる『クリミウス』への言及

ネルヴァルは作品内において2度『クリミウス』について言及している。最初は『パリの悪魔』*Diable à Paris* (1845年) に収録された「カナールの本当の話」*Histoire véridique du canard* の中である。『パリの悪魔』には多数の作家の文章が収録されている。序で言及したように幸いにも1845年に刊行された原書を入手することができた。入手した書籍は2巻本である。また Gallica から電子テキストも入手した。(9) canard とは鴨のことであるが、でたらめ・虚報という意味もある。ネルヴァルは次のように簡潔に述べている。

Le canard est une nouvelle quelquefois vraie, toujours exagérée, souvent fausse. (10)

カナールとは時折真実、いつも誇張され、しばしば間違っている報道である。

ネルヴァルは動物のカモ（鴨）についてこの文章を書いたわけではない。ネルヴァルが活躍した当時の報道を洒落な文章で描写している。この文章にはかなりの数の挿絵がついている。太古の昔からネルヴァルの時代までを対象にした文章に、動物の絵、人を表す風刺画、人と動物を組み合わせた絵、そして最後は人が皿の上に鴨を載せて持っている絵が掲載されている。そこに以下の文章が書かれている。多少長くなるが引用することにする。

Vous verrez qu'à force de percer la terre avec des outils-Mulloot, l'on découvrira dans son intérieur la planète *Nazor*, éclairée d'un soleil souterrain, magnifique canrd inventé au seizième siècle par Nicolas Klimius, dans son *Iter subterraneum*.

Après tout, cette planète *Nazor* existe sans doute, — et doit être tout bonnement l'enfer... Mais Flammèche le sait mieux que nous !

Ceci est un canard suprême ; il n'y a rien au delà. (11)

(ネルヴァルは Nazar を Nazor と表記している)

ミュロという器具で大地に穴をあけたおかげで、地球の内部から地下の太陽に照らし出されたナザール星が発見されるだろう。それは16世紀にニコラス・クリミウスが『地下世界』で作らした壮麗なカナルである。

要するにこのナザール星は恐らく存在する。そしてそれは本当に地獄かもしれない。しかしフラメッシュ（火花）は私たちよりもよくその事を知っている。

これが最高のカナルである。それ以上に何もない。(12)

ネルヴァルのこの文章には間違いや疑問な点がかかなりある。まずネルヴァルは作品の作者が誰であるかを知らない。これはすでに論じたように、ラテン語版及びフランス語訳に著者名が書かれていないからであり、ネルヴァルの責任ではない。『クリミウス』の作品中1664年という年号が記載されている。最後には1695年という年号も記載されている。よって16世紀ではなく、17世紀である。主人公のクリミウスはムロという器具で大地に穴を開けたわけではない。洞窟に入り、自分の身体に綱をつけていたのであるが、綱が切れてしまったのである。クリミウスが所有していたのは釘竿である。『クリミウス』のフランス語訳には次のように書かれている。

A peine étais-je descendu à la hauteur de dix ou de quinze coudées, que la corde se rompit. Ce malheur me fut annoncé par des cris et les clameurs de mes gens, que je n'entendis bientôt plus ; car je descendis avec une rapidité étonnante, et comme un autre Pluton,

Je m'ouvris un chemin jusqu'au fond des Abîmes ;

excepté qu'au lieu de sceptre j'avais un croc dans la main. (13)

10クデから15クデ（1クデは約50センチ）の高さを落ちるや否や、綱が折れた。この不幸は叫びと私の仲間の騒ぎによって知らされた、そしてすぐに私はもはや聞こえなくなった。というのは、私はすごい速さで落ち、それはもう一人のプリュトン（冥界と死者の神）のようだ。

私は深淵の奥までの道を開けた。

王杖（王権の象徴）の代わりに釘竿を持っていることを除いて。

以上のようにクリミウスは想定外の出来事により、綱が切れてしまい地中に落ちてしまった。ネルヴァルが書いているように、器具を使って地中に入ったわけではない。また次の疑問点は書名をラテン語表記である *Iter subterraneum* を使っていることである。主人公の名前はフランス語訳

Nicolas Klimius を使っている。

さてネルヴァルが『クリミアス』を言及した他の箇所は『東方紀行』 *Voyage en Orient* (1851) においてである。『東方紀行』の「ラマダンの夜」 *Les Nuits du Ramazan* の VI 幻 *L'apparition* に次のように書かれている。の VI 幻の次が VII 地下世界 *Le monde souterrain* である。

Elle vieillit déjà ; la fraîcheur la pénère de plus en plus ; des espèces entières d'animaux et de plantes ont disparu ; les races s'amointrissent, la durée de la vie s'abrège, et des sept métaux primitifs, la terre, dont la moelle se congèle et se dessèche, n'en reçoit déjà plus que cinq. Le soleil lui-même pâlit ; il doit s'éteindre dans cinq ou six milliers d'années. (14)

地球はすでに老いている、冷気が次第に地球に入り込んでいる、動物や植物の種全体が消えた、諸民族が弱まる、寿命が短くなる、7つの基本的な金属、地球の髓が凍り、干からびて、すでにもはや5つの金属しか受け取れない。太陽そのものが青ざめている。5, 6千年後には太陽そのものは消滅するに違いない。

ネルヴァルは「5つの金属しか受け取れない」の箇所にネルヴァル自身による注をつけている。注の冒頭に次のように書いている。

Les traditions sur lesquelles sont fondées les diverses scènes de cette légendes ne sont pas particulièrement aux Orientaux. Le moyen âge européen les a connues. (15)

この伝説の色々な場面の基となっている伝統は、近東諸国人にとって特別ではない。中世のヨーロッパはその伝統を知っていた。

ネルヴァルはこの注の文章の後に具体的な作品名等を列挙している。その中に『クリミアス』 *l'Iter suberraneum* de Klimius が含まれている。ネルヴァル全集の編者は次のような注をつけている。

Le livre raconte un voyage au centre de la Terre : le héros y découvre la planète Nazar, peuplé par de nombreuses nations. La descriptions de ces pays imaginaires sert de prétexte à une satire de l'Europe contemporaine. (16)

その本は地球の中心への旅行を語っている、主人公はそこで沢山の民族が住んでいるナザール星を発見する。この想像上の国の描写は同時代のヨーロッパの風刺の口実の役目を果たしている。

この注に書かれているとおりであり、『クリミアス』で描かれているナザール星の多くの国々は

同時代のヨーロッパの国々の風刺である。よってすでに述べたように1741年に出版されたラテン語版及び同年出版されたフランス語訳の表紙には作者名は記載されていない。

『クリミアス』の地下世界とネルヴァルの『東方紀行』の地下世界は、かなり違っている。ネルヴァルは『東方紀行』の中に「朝の女王と精霊たちの王ソリマンの物語」*Histoire de la reine du Matin, prince des génies* (以下「朝の女王」)を収録している。その中にすでに引用した文章(「幻」)が書かれている。ネルヴァルの描いた地下世界は風刺ではない。主人公アドニラムが見た地下世界は宗教的な描写で埋めつくされている。『クリミアス』と「朝の女王」の共通点はグリフォンが登場することと洞窟という単語が出てくることだと考えている。

ここでネルヴァルはラテン語の書名を書いていることを強調したい。ネルヴァルが挙げた他の具体例の中には地下世界とは直接関係のない書籍がかなり含まれていることも明記しておく。

IV. ネルヴァルはなぜ『クリミアス』を言及したのか？

『カナールの本当の話』から読み取れるのは、ネルヴァルが『クリミアス』という作品が刊行当時のヨーロッパの政治を地中という架空の場所を使って痛烈に批判していることを知っていたということである。しかしすでに述べたように作品名はラテン語表記、主人公の名前はフランス語訳からとってきており、首尾一貫性がない。ここでははっきり言えることは、ネルヴァルは地中世界に突入したクリミアスの図版を見ていない可能性が高いと言える。もし1度でも見ていたら「ミュロ」という器具で穴をあけるなどは書かないと考えられる。

現時点で言えることはラテン語版で全く図版がない本、または皇帝の姿を描いた図版だけが掲載された本を参照し、あまり中身を理解していなかった可能性が高いと考えている。ただしネルヴァルがフランス語訳を参照しなかったという証拠はどこにもないことも明記しておく。

また『東方紀行』におけるネルヴァルによる言及はラテン語版の書籍名だけである。しかし重要なのはその次の章が「地下世界」を描いているという点である。ネルヴァルが地下世界を考察する際に多くの書籍を参照したことは明らかであろう。ひとつひとつの書物を熟読したのか？または題名だけを知っていたのかは個々の作品によって違うと考えられる。

V. 結論

ネルヴァルが『クリミアス』のラテン語版またはフランス語訳のどの版を参考にしたのかを結論づける決定的な証拠はない。ただしネルヴァルがラテン語の題名しか知らなかったことは事実である。彼は『クリミアス』が作品刊行当時のヨーロッパ社会を批判している書物であることは理解していた。またネルヴァルの『東方紀行』にとって重要なテーマである「地下世界」を考察するための重要文献であることも理解していたのであろう。ただし残念ながらネルヴァルが『クリミアス』を熟読し、深く理解していたとは言い切れないというのが本論文の結論である。

注

- (1) ホルベリ著、多賀茂 訳「ニコラス・クリミウスの地下世界への旅」『ユートピア旅行記叢書第12巻』岩波書店、1999年。本論文で『クリミウス』のフランス語訳を引用する際に参考にした。邦訳を参考にして、ニコラス・クリミウスと表記することにした。
- (2) *Nicolai Klimii Iter subterraneum*, Hafniæ & Lipsiæ, Sumptibus Iacobi Preussii, 1741. 廉価版が販売されている。フランス国立図書館は本書（ラテン語版）を所有しているが、無料電子テキストサービスの対象ではない。出版地はコペンハーゲンとライプツィヒであると本に記載されている。本書に著者名は記載されていない。Open Library では1741年版の電子テキスト（カラー版）を公開している。他にもネット上では数種類の電子テキストが公開されているが、収録されている図版の数が違っている。
- (3) *Voyage de Nocolas Klimius dans le monde souterrain, contenant une nouvelle théorie de la terre, et l'Histoire d'une cinquième monarchie inconnue jusqu'à présent*. Ouvrage tiré de la Bibliothèque (sic) de M^f. B. Abelin ; et traduit du Latin par M^f. De Mauvillon, Copenhague, chez Jaques Preuss, 1741. このフランス語訳はフランス国立図書館電子テキストサイト Gallica に収録されている。またアッシュト社が廉価版を販売している。本書にも著者名は記載されていない。以後本書を引用する際はNKFと略すことにする。
フランス国立図書館の人物データによるとÉléazar de Mauvillon (1712-1779) はフランスのタラスコン (Tarascon) で生まれ、ドイツのブラウンシュヴァイク (Brunswick 英語の綴り) で亡くなった。歴史学者、文法学者、文献学者であった。ポーランド王の秘書でもあった。そして数多くの著書、翻訳を残している。本文にも記載したように、Abelin は物語に登場する人物名である。
- (4) 岩波書店の翻訳では アベランと書かれているが、フランス語の綴りに従いアブランと表記する。登場人物の表記に関してはフランス語訳を尊重し、カタカナ表記する。
- (5) NKF, p.386.
- (6) *Voyages imaginaires, songes, visions, et romans cabalistiques*, tome dix-neuvième, Amsterdam et Paris, Rue et Hôtel Serpente, 1788. 多賀氏は本書を日本語訳の解説で紹介している。VISと略す。
- (7) VIS, p.219.
- (8) ネットでは『クリミウス』の電子テキストが数種類公開されている。本文で紹介したもの以外では次のラテン語版が存在する。

1741年版 注(2)で紹介した電子テキストと表紙は同じである。しかし図版が2枚しか収録されていない。電子化の際に手抜きをしたとしかか考えようがない。

1754年版 注(2)で紹介した電子テキストと比較すると、出版社名が多少違う。出版地は1741年版と同様である。Editio Tertia Auctior et Emendatior (第3増補改訂版) と書かれている。図版は8枚に増えている。1741年版の図版と比較すると、図版の文字の字体は酷似している。画風についても非常によく似ている。「人が入る箱を綱でつなぎとめて運んでいる鳥たちが飛んでいる絵」「食事会」「食事会」「音楽の国の住民」の4枚が追加されている。

1754年版 上記の電子テキストと比較すると、8枚の図版の順番が違う。

この3つの版を本文で紹介できないのは、所蔵している図書館が明確に記載されていないからである。また電子化作業がかなり杜撰であり、考察の対象とするのに躊躇する部分がある。

- (9) *Histoire véridique du canard, Le Diable à Paris*, Paris, J. Hetzel, 1845. ネルヴァルの文章が収録されている書籍は1845年に出版された。原書の表紙に第1巻と記載されているわけではない。装丁された書籍の背表紙に1と書かれている。2巻目は1846年に出版された。第1巻と同様に表紙に第2巻と書かれているわけではない。装丁された書籍の背表紙に2と書かれている。翻訳をする際に田村毅訳「カナル真偽譚」『ネルヴァル全集 II』筑摩書房、1997年の翻訳及び解説を参考にした。この書籍を引用する際はHVCと略すことにする。*Diable à Paris*の復刻版がAthena Pressから出版されており、別冊がついている。柏木隆雄「*Le Diable à Paris* 復刻を喜ぶ」と小林宣之「ピエール＝ジュール・エッツェルと『パリの悪魔』」が収録されている。
- (10) HVC, p.281.
- (11) HVC, p.288.
- (12) Flammècheがあだ名であることは*Diable à Paris*の本文に書かれている。注(9)で紹介した田村毅訳「カナル真偽譚」p.234にも書かれている。
- (13) NKF, P.6.
- (14) Gérard de Nerval, *Œuvres complètes*, tome II, Paris, Gallimard, coll. 《Bibliothèque de la Pléiade》1984, pp.721-722. 以下この巻をPL. IIと略す。翻訳をする際に『ネルヴァル全集III 東方の幻』筑摩書房、1998年に収録されている野崎歙・橋本綱訳『東方紀行』を参考にした。
- (15) PL.II, p.721.
- (16) PL.II, p.1606.

(ませ れいこ：英語学科 教授)